

同 次郎吉様 本多安房守
同 小平次様

八丈嶋に被遣候御米さし札。

表に

浮田殿一類中に被指遣候

米七十俵之内

裏に

白米四斗入

同荷物二荷之さし札。但大札二枚。

表に

浮田殿一類中の

裏に

二箇之内

一、御代官并下裁許に被下候品聞番持参、同日相濟候事。

一、八丈嶋浮田殿に被遣候米相渡候砌、深川に拙者共罷越申管。元文四年夏眞田左治兵衛罷越候。前藤足輕・小頭并

平足輕等指遣、御藏元詮議に而請負人相極、右御米はかち米に致し、俵認等例々格有之。右認等右足輕等致支配見届、藏に入致封印罷歸、追而拙者共罷越。御米船に積申事共抔は、右足輕擲、上乘は拙者共いたし、大船に罷越、八丈嶋公儀役人何之誰に相渡、請取切手取罷歸る事。

一、寛延元年戊辰八月十一日浮田殿一類中に被遣物之内、深川御藏米四斗俵七十俵今日便船に御傳附、公儀御用船服部源藏殿船に積入、齋藤喜六郎殿・下代上嶋百四郎に相渡、百四郎請取手形取來、御用所に相達る。右御用宮崎久兵衛罷越す。同船永來新左衛門・升屋次左衛門筋遠より乗出す。外供船一艘。且又御米船者、野尻十右衛門并割場足輕小頭湯川清八、平足輕一人、小遣兩人、竹屋長兵衛・中嶋屋新四郎等。

七 御土藏貯藏金銀之儀覺

御土藏集金銀御有物大銀奉行に入帳之寫

一、六 枚 大佛判

一、八十八匁 松倉金

一、七匁六分 箔 金

無之、捨り居申分左之通。

覺

一、一萬三千二百十五兩 慶長金小判

一、十八切 同 一步

一、百四十三貫五百七十七匁四分二厘 同 銀

右之御金、只今も大がね之入帳には番載、御算用相立候得ども、趣は右に調候通前々より如此之事。

八 言上・諸達・伺之儀覺

言上物覺

一、月々御入用銀。月の日

一、御近習頭直渡り金銀。

一、爲替銀。

一、深川御米拂代。

一、深川御廻米初着船。

一、同不残着船之上。

一、加賀屋與七郎に被下銀。

一、八匁六分九厘 吹拔金
一、三貫八百十四匁四分一厘 上 銀
一、二十三匁五分 銀花配
一、三匁三分七厘 上、金
一、六百五十一匁八分三厘七毛 燒 金
一、六十三匁三分九厘 玉 金
此九口、享保二十年に遠田勘右衛門に不殘相渡す。
外に銀の無垢釜一つ。但入なし。
外に一つ御封付之箱。
一、二十枚与二百二十八匁五分 新 銀
此銀子奥御納戸より預り。
一、百九十五匁四分八厘 同 斷
會所銀之残り。
一、銀子入箱一つ會所印の封
先年古物拂代の残り。但會所奉行より預置。

一、江戸會所御金、先年より立物与名付、正味金銀は方々御取替、金澤に而當時證文に相成居申、御返濟之御沙汰も